

ふるさとの魅力新発見

長沼歴史ぐるっと散歩ガイド

俳句と文化の薫りただよう「長沼」を歩いてみよう



一茶と俳諧寺十哲の句碑 (長沼公園内：マップ⑥)

村松春甫 画

長沼と一茶

小林一茶は、江戸時代後期、文化・文政時代（1804～1830）に活躍した俳人である。一茶の俳人としての活躍は幅広く、作品の多さも特別である。

一茶（本名・小林弥太郎）は、宝暦十三年（1763）に柏原村（現在の信濃町）に生まれ、15歳のときに江戸へ奉公に出た。江戸に出て、職を転々するなかで俳諧を学び、その後、風の吹くまま、気の向くまま全国各地に俳諧の旅を続け、約二万点の俳句を作った。

一茶は、帰郷するたびに北信濃の門人たちと交流し、積極的に指導のため門人宅を訪問した。なかでも長沼は、以前から俳諧が盛んな地域で俳句の愛好者が多くいたが、一茶との出会いは、更に活動を盛んにし、一緒に定例句会「月花会」を催したり、句集の出版にもあたった。「長沼十哲」と呼ばれる門人たちが一茶をあたたく迎えた。晩年の一茶は、この長沼へせつせと通いつめ、居心地もよく、驚くことに660日以上も逗留している。この史実をみても、一茶にとっても長沼は特別な地域であり、多くの作品やドラマが生まれたのである。

①長沼神社境内

きりぎりすあまり鳴くなよ我も秋
あやかりに下戸でも通せ菊の花
松宇
士英



西島 士英：にしじま しえい (1784~1842)

大町(上町)の生まれ、江戸に出て、市河米庵に学んだ。書家でもあり、禾堂(かどう)とも号す。上町宿の造酒屋名主。西巖寺に禾堂の筆塚(石碑)があることでも有名。九番日記などに一茶との逸話、竹節人參(註：朝鮮人參)がある。

さば(娑婆)の緑 うす花ざくら けふちると
しらば木陰を いかではなれん 一茶

松井 松宇：まつい しょうう(1757~1827)

大町(上町)の生まれ、通称善右衛門。聞濤軒とも号する。上町宿の名主・問屋。還暦の賀集として「杖の竹」を出版。一茶の門人が協力し、また、一茶の代撰でもある。一茶に先だって没したので寂しい思いの一茶は、「きのふは鮮魚に宴して今日は松宇仏」と詠んでいる。

夜涼が 笑い納めで ありしよな 一茶

②農産社

菜の花や門の雀もからさわぎ
はつ蛍町一ぱい通りけり
犬ころを秤にかける日永哉

掬斗
春甫
素鏡



⑥長沼公園内

洪水

首たけの水にもそよぐ穂麦哉

一茶

袖口になくなる春の寒かな
畑くろに風巾持ながらねる子かな
桑の木は坊主にされて閑古鳥
東山けさ西山の紅葉かな
出代りや今としては花のよしの山
やれ打つな蠅が手をすり足をする
青空や理屈のぬけし穂の暮
草の戸におっかけ客や菊の花
星あかり蝦夷も小春のやうす哉
菜畑もあなたのもので御とり越

白齊
雲士
二休
掬斗
士英
一茶
魚淵
月好
素鏡
春甫



「長沼連衆画象寄合書」(俳諧寺十哲像)は、村松春甫が描いたものである。この十哲のなかには、一茶も、神郷村石の峰村白齋も入っている。長沼からは八人も入っており、その比重の大きさを示している。この図に、松宇と呂芳を加えると、「長沼十哲」である。

この石碑は、十哲像をそのまま刻み、一茶の別の句を加えて建立したものである。

(十哲像の原本は、信濃町の「一茶記念館」に所蔵されている)



③吉祥庵前

うめが香やまことに月は一日
 春風や犬の連れてぬけ参り
 うたたねの軒はにくし梅の花

雲士 魚淵 呂芳



④長沼支所前

螢火や雨をぬい行く夜の影
 鶉鳥鳴けば榎も大事なり

月好 雲士

住田 素鏡：すみだ そきょう(1772～1847)

穂保（六地蔵町）の生まれ、名は保堅、通称奥右衛門。裕福な大農家・村役人。門人、多くの句を集め、一茶の代撰では最後である「たねおろし」を出版。一茶は、素鏡の母の米寿に、
 「門畠や 米の字なりの 雪解水 一茶」と詠んでいる。

村松 春甫：むらまつ しゅんぽ(1772～1858)

穂保（六地蔵町）の生まれ、号は胡庵、鷗巢、など。若くして江戸で茶礼を学び、後、狩野了承に絵を学ぶ画家としても有名で掛け軸なども多く、殊に色彩が巧みで花鳥の作品など愛好者の垂涎である。現存する一茶の肖像画は春甫の筆になるものが多い。一茶の門人第一号。長沼の門人との紹介も春甫によるものである。門人仲間の多くの句を集め、一茶の代撰で「葦草」を出版。

蝶かけば 蝶のとまるや 絵具皿 一茶

中村 掬斗：なかむら きくと(1772～1867)

穂保（六地蔵町）の生まれ、通称順右、百翁の号あり、医者である。96歳の長寿であった。一茶が江戸から故郷入りした悩み多き時、一番の親交あり。掬斗宅へ二泊して、一茶は「きくと夢」の一文を残している。その後また江戸へ。

次ぎの句は掬斗宅での作品か？

故郷や よるとさはると 茨の花 一茶
 暁の 夢をはめなん 時鳥 一茶

立花 呂芳：たちばな ろほう(不明～1830)

穂保（六地蔵町）、真言宗経善寺住職。寺は明治初期に廃寺。その子其一庵完芳も一茶に師事した。一茶は寝慣れた寺で我が家のような、といった。一茶との交流も多く、七番日記に記載あり。

唐がらし 詠(ながめら)れけり 門清水 一茶



⑤長沼支所前

鶉鳴くや山一つくれふたつ暮
 陽炎やくたびれ顔の古仏

春甫 呂芳



⑦長沼公園内

日の漏れて蟻の目につく夏木立
 鉢うへの松にかふせる頭巾かな

二休 素鏡



⑧長沼公園内
我庵を狭しと牡丹咲にけり
はつ雪や雀が羽で歩く程

魚淵
松宇



⑨長沼公園内
小鼠の先かくれ家や炭俵
藪蔭やことし酒屋のことし酒

掬斗
士英

佐藤 魚淵：さとう なぶち(1755～1834)
穂保（内町）、吉村家の生まれ、名は信胤。和蘭学を学び医者でもあり、俳諧の他にも趣味の広い人で、正風院、草不庵、などの号あり。佐久間象山から漢字の指導を受けるなどの交流もあった。一茶より八歳年長で門人の代表格であった。「木槿集」を出版。三年後「あとまつり」を江戸で出版。一茶の没後六年、門人の取りまとめ役。

白川 月好：しらかわ げっこう(不明～1834)
津野、正覚寺の南隣にあった原立寺住職。寺は現在、妻科に移っている。俳句の他、書、画ともに巧者であったが、作品は多くはない。

吉村 雲士：よしむら うんし(1779～1830)
穂保（内町）、裕福な大農家。通称伴七。号は雄士など。一茶との交流の遺品も多い。孫になる吉村仙太夫が一茶晩年の句を整理した「だん袋」などの稿本は、特に有名。
里の子や 雪待ちかねし 株角力 一茶

若槻 二休：わかつき じきゅう(1778～1843)
津野、真宗正覚寺住職。花然庵とも号する。茶の湯、古流插花にも通じ、一茶とも交流が深い。「連衆画像寄合書」は正覚寺でできる。百旦那 ごろりごろりと 御慶かな 一茶



⑩津野公会堂前
長沼の渡しにて
角力とりが立って呉れけり秋の風 一茶
鐘つきの肱から出たるはつ日哉 二休



⑪赤沼公会堂前
粒粒皆心苦
半分はあせの玉かよ稲の露 一茶

